

考 資 料

土木學會誌 第五卷第三號 大正八年六月

鑿 岩 機 試 驗 成 績

本文ハ鐵道院技師櫻井爭三氏ノ研究ニシテ工學上頗ル有益ナルヲ以テ茲ニ之ヲ登載ス

鑿岩機ヲ使用シテ岩石ニ穿孔セントスル場合ニ於テハ岩石ノ材質、孔ノ大サ、錐ノ材質、燒入ノ方法、
刃先ノ形狀、使用空氣量、壓力並ニ作業方法等種々ナル條件ニ依リテ同一機械ヲ使用スルモ其機械
カ成シ得タル仕事ノ量ニ著シキ差異アルハ明カナリ而シテ本試驗ハ以上記載セシ種々ノ複雜ナ
ル場合ヲ避ケ最モ單純ナル條件ノ下ニ三四ノ鑿岩機ノ種類ニ就キテ其機械カ普通使用狀態ニ於
テ出シ得ル仕事ノ量ヲ測定シ單ニ機械的能率ノ優劣ヲ比較シタリ

本試驗ニ使用シタル鑿岩機ハ次ノ四種トス

一 いんがそーるらんどこむばにー (Ingersoll-Rand Co.) ノ舊型假ニ符號(E)ヲ以テ示ス

二 同會社ノ新型符號(D)ヲ以テ示ス

三 くらじまくするくどりるえんじえんじにー やりんぐうおーくす (Chlmax Rock Drill & Engineering Works, Ltd.) ノはじどろまくす (Hydromax) 型符號(A)ヲ以テ示ス

四 がでりうすえんじこむばにー (Gadelius & Co.) ノ型符號(G)ヲ以テ示ス

以上四種ハ壓搾空氣ヲ使用シテ原動力ヲ起サシムルモノニシテ即チ穿孔セントスル岩石ニ向ツ
テ錐ニ打擊的反復運動ヲナサシメ以テ岩石ヲ粉碎セシム而シテ錐ノ刃先カ岩石ニ接觸スル部分

670

ヲ常ニ變遷セシム岩石ヲ有效ニ破碎セシメンカ爲錐ニ回轉運動ヲナサシメ且穿孔スルニ從ヒ錐ヲ漸次前方ニ送ル運動ヲナサシム此打擊的反復運動ハ總テ壓搾空氣ニ依リテ起サシムルモ回轉運動並ニ送リ運動ハ型ニ依リテ種々其方法ヲ異ニセリ斯ク補助的運動方法ハ各種異ナルモ主要ナシ次ニ參考トシテ或一種ノ岩石ニ就キテ穿孔試験ヲナシ併セテ其成績ヲモ記載セリ

本試験ニ於テ各機其必要空氣量ヲ異ニスルカ故ニ先使用空氣量ヲ測定スル必要アリ此裝置トンテ空氣壓搾機ヨリ空氣溜(れしーばー)中ニ空氣ヲ送リ之ニ壓力計ヲ取付ケ其壓力ヲ測定シ其放出口ニ空氣量測定器(New Jersey Meter Co. 製)「Tolldometer」ヲ裝置シ之ヨリ鑿岩機ノ空氣送入口ニ連結セシメ使用空氣量ヲ測定シタリ而シテ普通使用狀態ニテハ空氣ノ壓力ハ百封度平方時以下ニシテ多少ノ低減(どろく)アリ依テ試験中ハ常ニ八十七封度平方時ヲ保タシメタリ

次ニ以上ノ壓力ノ空氣ヲ使用シ錐ノ成シ得ル仕事量ヲ測定スル爲略圖ニ示ス如キ裝置ヲ作製セリ其裝置タルヤ振動等種々ナル故障ヲ起ス可キ障害ノ伴フモノナルカ故ニ略圖ノ如ク簡單ナラサレトモ大體ノ主意ニ於テハ差異ナシ先 B_1 B_2 二枚ノ鐵板ノ間ニ或程度迄壓縮セル彈機 S ヲ挿ミ B_2 ハ固定セラレ B_1 ハ動キ得ル裝置ニシテ錐 D ノ頭部ヲ特別ノ形ニ作り之ヲ以テ鐵板 B_1 ヲ打擊セシム然ル時ハ B_1 鐵板ハ△タケ錐 D ノ反復運動ニ伴ヒ移動ス可シ

今 L ヲ彈機 S ノ最初壓縮セラレタル時ノ高サ(時ヲ以テ示ス)トシ

P ヲ彈機 C_L ノ高サニ壓縮セラレタル時ノ荷重(封度ヲ以テ示ス)トシ
 N ヲ錐 D ノ反復回數(一秒間ノ回數ヲ示ス)トスレハ錐 D カ彈機 S ニ對シテ成シタル仕事ノ量ハ

$$\text{仕事量 } W \left(\text{封度} / \text{秒} \right) = \frac{\Delta L \left(P + \frac{\Delta P}{2} \right) N}{12} = \frac{\Delta L \cdot P \cdot N}{12} + \frac{\Delta L \cdot \Delta P \cdot N}{24} = \frac{\Delta L \cdot P \cdot N}{12}$$

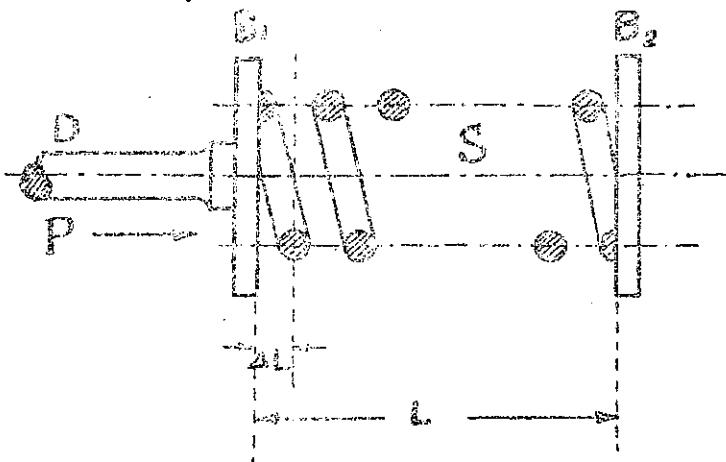
(second order の項ヲ略ス)

以上ノ式ニ於テ P ノ測ル事ハ困難ナラズ即チ弾機試験機ニ依リテ豫メ弾機ノ高サニ對スル荷重 P ノ測定シ置クモノトス。次ニ反復回数 N ノ測ルニハ多少ノ困難ヲ感セリ之ハ鐵板 B_1 ノ一端ニ突起物ヲ裝置シ其カ幅一時ノ自動的ニ回轉セル長キ紙面ニ一打擊毎ニ一回ノ印章ヲ遺サシメ其運轉時間ヲ測定シテ其時間内ニ捺印セラレタル痕跡ヲ計算シ一秒間ノ反復回数 N ヲ求メタリ

△ Δ 测定スルニハ先打擊回数ヲ測定スル裝置ヲ利用シ其突起物ノ紙面ニ接觸セシ痕跡ノ印セラル、ト印セラレサルトノ境界ニ近キ點ヲ測定シ其突起物ト紙面トノ間隔ヲゲーリニ依リテ測定シタリ此値ハ實ニ數十回ノ試験ニ依リテ決定シタルモノニシテ四種ノ鑿岩機ニ同シ重量(九封度)ノ錐 D ノ使用シテ ΔL ≈ 0.049 时ニ一定ナラシムル様 L ノ加減シテ之ニ對スル P ノ求メタリ各機ニ就キ同シ試験ヲ十回反復シ其平均ノ値ヲ以テ計算ヲナシタリ次ニ其成績ヲ示ス

第一表

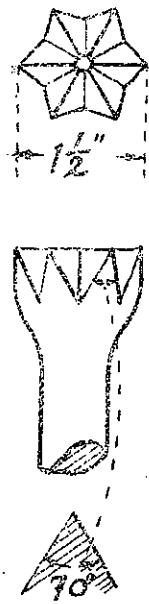
機械符號	壓力八七封度平 方時ノ壓縮空氣 (使用セシ時)	一秒間ノ 量 Δ 吹封度 打擊力 P 封度	馬力數 $H.P.$ $\frac{P \cdot N \cdot \Delta L}{12}$	一秒間ノ仕事 量 Δ 吹封度 打擊數 N	馬力數 $H.P.$ $\frac{P \cdot N \cdot \Delta L}{12}$	一秒間ニ付平均空氣量 氣壓=換算シ テ立方呎」 方呎	馬力數 $H.P.$ $\frac{P \cdot N \cdot \Delta L}{12}$	
Gadelius (G)	四、五四〇	一五・〇	二七八・〇	〇・四〇五	〇・三三	〇・〇四九	一・四五	〇・六九



機械符號	打擊力P 封度	一秒間ノ仕事	馬力數HP.	一秒間ノ仕事	馬力數HP.	一秒間ニ使用	一馬力ニ付キ	一秒間ニ一馬力ニ付キ	一秒間ニ一馬力ニ付キ
	P.N.G.L	N	HP.	N	HP.	セシ空氣量大	セシ空氣量大	セシ空氣量大	セシ空氣量大
Hydromax (A)	三・二〇〇	一三・三	一七三・七	〇・三一六	〇・六五	〇・〇四九	二一・〇六	〇・四九	一・〇六
Ingersoll old (E)	一・五六〇	一一・六	一三六・一	〇・四二九	〇・九〇	〇・〇四〇	一一・一〇	〇・四八	一・一〇
Ingersoll new (D)	一・一四〇	一七・八	二五五・四	〇・四六四	〇・八九	〇・〇三一	一・九二	〇・五二	一・九二

以上ノ結果ヲ見ルニ(A)機ハ打擊數最少ナキモ打擊力ハ可ナリ大ナリ(D)機ハ打擊數最モ大ナルモ其打擊力最モ小ナリ(G)機ハ打擊力最モ大ニシテ且打擊數モ可ナリ多キカ故ニ全體ノ成ス仕事ノ量ヨリ見ル時ハ(G)最モ大ナル仕事ヲナシ(D)(A)(E)ノ順序ニ其量大ナリ依テ今假ニ各機同量ノ空氣ヲ使用シテ其成ス所ノ仕事量ヲ比較セハ(G)ハ最モ大ナル仕事ヲナシ(D)(A)(E)ノ順序ニ其成ス仕事量減少ス可シ依テ單ニ機械的ノ能率ヲ比較セハ(G)最モ良好ニシテ(D)(A)(E)ノ順序トナル

以上記載ノ四種ノ鑿岩機ヲ使用シテ石英質ノ岩石ノ成ル可ク等質ナル所ヲ選定シ直徑一吋半ノ大サノ孔ヲ深サ一吋穿ツニ要セシ時間並ニ空氣量ヲ測定シ前試験ノ參考トセリ但シ使用錐ハ總テ其重量八封度ニシテ刃先ノ角度ヲ七十度トシ刃數ヲ六枚トシ錐ノ先端ノ直徑ヲ一吋半ニシ同



刃先の形状

質材料ヨリ作リ同一方法ニ依リテ焼入ラナシタルモノトス蓋シ刃先ノ角度ヲ七十度トナシタルハ本試験ニ使用シタル質ノ岩石(伊豆石)ニ對シ他ノ條件ヲ同一ニシ刃先角度カ九十度七十度六十度ノ三種ノ錐ヲ作り穿孔試験ヲナシタルニ六十度ノ者ハ銳角過キテ破碎シ易ク九十五度ノ者ハ鈍角過キテ丸ク擦滅セラレ七

十度ハ其中間ニ於テ最モ有效ナル角度ナル事ヲ確カメ得タレハナリ
左ニ其試験成績ヲ掲ク

第二表

參考資料 鑿岩機試驗成績

以上ノ結果ヲ見ルニ岩石ノ正確ニ等質ナラサルト各機ニ使用セシ壓搾空氣ノ壓力ニ多少ノ差ア

ルカ故ニ之ヲ以テ正確ナル比較ヲナス事ハ困難ナルモ大體ニ於テ穿孔ノ時間ハ(G)最モ少ナク(D)(E)ノ順ニ増加セリ而シテ空氣使用量モ(G)最モ少ナク(D)(A)(E)ノ順ニ増加セリ以上試験ノ結果ヲ綜合スル時ハ(G)最モ良好ニシテ(D)(A)(E)ノ順トナル(完)

混疑土壁ヲ通シテ空氣ノ漏リヲ計リシ簡單ナル實驗

本文ハ内務技師加納盛吉氏ノ實驗報告ニシテ技術上頗ル有益ナルヲ以テ茲ニ之ヲ掲載ス

内務省テハ大阪市ノ北ヲ流ル、運河ノ水ヲ一部分六軒屋川ニ排出スル目的ヲ以テ市ノ西ニアル鼠島ト云フ處ニ直徑四呎ノさいふをんうえいやヲ二個築造スル計畫ヲ立テタ、ソレハ第一圖ノ如キ構造テ上流ト下流ノヘビどニ依リテたんくノ内ニ水ヲ充タシ又抜キソノぐらびていヲ利用シテさいふをんノ空氣ヲばしやるばきりむニスル自働的裝置テアルカラうえいやノ開閉ハ極メテ容易テ且ツ安全テアル

さいふをんハ空氣ノりつけ一ぢカ多クテハ到底動カヌノテ先以テこんくりーとノ氣密程度ヲ知ル爲メノ豫備試験ヲ必要トスル

うおーるハ普通ノこんくりーとテ厚一尺五寸ト假定シテ見テ先ツ三尺角ノ立方體ヲ作ツテ其ノさゆーぶノ中心迄がす管ヲ埋込ミ開口セシメ管口ニ於テこんくりーとニ直徑約五吋半ノ球形空洞ヲ置イタ此ノ空洞カラ四方八方何シニ向ツテ空氣カ逃ヶ出シテモ一尺五寸以上ノこんくりーとヲ通ラネハナラヌ其レニ吹込み空氣ノ壓力ハ大ナルコトヲ要シナイ何トナレハうえいやノ上